

花ちゃん・オー君・モンタ博士のわくわくドキドキ国立てくてく

国立第七小学校 平成26年2月10日 NO.86



花ちゃん 「この前の、菅原道真のお話はとてもよくわかりました。」

モンタ博士「よかったね。これからもタイムマシンでいろいろな人に来てもらおう。」

オー君 「そうですね。どんな人が登場（とうじょう）するか、楽しみです。」

モンタ博士「それにしても、ウメの花はいいね。とってもいい。大好きだね。」

オー君 「そうなんですか、でも、どうしてそんなに好きなんですか。」

モンタ博士「まあ、なんというかなあ。ウメのよさは、その花のさく季節（きせつ）だね。」

花ちゃん 「花のさく季節？どういうことですか。」

モンタ博士「そうだね。気温（きおん）が上がらず、つめたい風がふいていても、ウメの花が咲き出すと、もうすぐ春なんだ、という気分させてくれるだろう。」

オー君 「春がくるというのは、なんだか、わくわくドキドキしますね。」

花ちゃん 「それに、心がなごむ感じで、希望（きぼう）がわくような気がしますね。」

モンタ博士「『梅一輪（いちりん）一輪ほどのあたたかさ』（服部嵐雪：作）という俳句（はいく）もあってね、梅の花が一輪また一輪とさくにつれて、気候（きこう）も少しずつ、あたたかさを増（ま）すという意味（いみ）なんだ。」

オー君 「ウメの花は、学校にもあるし、くるとちゅうにも、あちこちにあるね。」

モンタ博士「そうだね。でも、ウメは、もともと日本にあった植物ではないんだよ。」

オー君 「えー！日本のものじゃないの。」

モンタ博士「そうだよ。今から1400年くらい前に、中国から伝わったものらしいよ。」

花ちゃん 「へえー。そうなんですか。」

モンタ博士「それに、今では『花』と言えば、サクラのことで、日本の国花（中国の国花はウメ）でもあるけど、そのころは、サクラよりも、ウメのほうが人気があったそうなんだ。」

花ちゃん 「へえー。そうなんですか。でも、どうして、そんなことがわかるんですか。」

モンタ博士「そのころのいろいろな人が作った和歌集（5・7・5・7・7）で『万葉集』（まんようしゅう）というものがあるんだけど、その中に出てくる植物では、2番目に多かったそうなんだ。」

オー君 「万葉集？初めて聞くなあ。それで、ウメの花はいくつくらい出てくるの。」

モンタ博士「ウメはハギについて多くて119首もあるけど、サクラは45首だけさ。」

オー君 「ふーん。それにしても、ウメのお花って、けっこういいかおりがするよね。校長室の前にたくさんのウメの花があったでしょ。おいら、五感（ごかん）を活用（かつよう）させて観察（かんさつ）したんだ。」

花ちゃん 「そうね。自分の体が観察道具なんですね。私もくんくんかおりをかぐわ。」

モンタ博士「そうだね。ところで、あることわざに、『梅は蕾（つぼみ）より香あり』とあるんだ。才能のある人や大成（たいせい）する人は、小さいころから、それがあるといふことで、蕾（つぼみ）の時からよい香りをただよわせる梅にたとえたんだ。」

ウメと梅干

ウメの果実は酸味が強くて生食に適さず、全て加工して利用する。シソの葉とともに塩漬けにし、あるいは塩漬けにしたウメをシソの葉に包んだ梅干は米飯とよく和合し、殺菌作用もあり、アルカリ性食品としても有名で、一般家庭でも常備の食品となっている。なお、梅をシソとともに漬けて赤く染めるのは日本だけである。